近世説美少年錄 七編 壹

へ13
3567
31

門へ13
號3567
巻1

近世説美少年錄 五冊

曲亭翁口授編

一陽齋豐國畫
文榮堂
群玉堂 精刊

慶應大學圖書館
昭34.6.3
藏書

新刻石童子訓第四版附言

人生れて五七歳鳩車竹馬の始より。年二五五に至るまで。遊戯娯樂の外に嗜慾多。賢と愚と不肖とを問ず。二十ふたゝび嗜慾ヨワろ。余れども其好む所同からず。親に唐山の故事を思ふに黄帝は衛生を好。堯舜は仁義を好。桀紂は不仁を好。顔回は学を好。宰予は晝寢を好。莊周は寓言を好。淮南王は豆腐を好。蔡邕は瘡痂を喫ふを好。杜預は左傳を好。陶淵明は菊を好。陶弘景は松風を好。李白杜子美は詩を好。羅貫中は俗語小説を好むが如く枚挙るに遑あらず。是よりして下。和漢の世俗。其嗜慾甚多。敗れを取らざるとなく者多し。茶を食し酒を好して飽とゝ。命を破り。驕奢を好して禮を失と。貨財を積て散ずるとゝ。禍その家を破る者あり。只六の幣のみならず。賤くして貴を犯すを好者多し。辜あり。愚にして用られんとを好む者は屢譏る。或は外物を飾る

らぎーて生さ者ハ其財用足らぎーて窮鬼の祟あり好ミて思慮を費ス者ハ覚ぎーて命を縮め好ミて戰ふ者ハ疵を蒙り好ミて游者ハ溺るゝ事あり或ハ人の悪を好ミ或不学ゆゑ先達を譏りて彼名を貴ぶ者ハ是小人の好む所君子ハ悪む所ゑ皆是好む所の甚しきを至りてハ敗るゝ事ざるべし故ふ大人君子ハ好憎ふを宜しとも人其好ミを知る時ハ下なる者是ふ由く其機を攬ぎと必ず慎ぎハあるべし況士庶人の貪賤ゆゑや嗜慾好憎の甚ぎを利あることふとも終ふ害あり世ふ人の父母ゆる者初其子ふ教ゆる情を折ぎ慾を禁ずゆ第一義と做ぎべき而已壁書ゆ予ゆ如ぎ素より美食を嗜ぎ美衣を好ぎ富貴を羨ぎ貧賤を侮らぎ好む所ハ讀書筆研夜を以て日ふ継ぐ者五六十年人の師ゆ事ゆ好ぎ故ふ悄地ふ戲墨を事として世の蒙昧を醒さぎく欲を其著蘊して大小三百餘種是ゆ為ふ日夜眼氣を使ふ者五十餘年の久きふ至りて瞳子年々ふ衰耗して

子夏と憂を同じくぎ是ふ加ゆふ疝痛痰飲身ふ逼りて坐臥も亦安ゆ是より以来好む所を排斥して獨坐静默木偶ふ異ゆぎ其好ミの過ぎを後悔何ぞ及ぶ是将天乎命ゆる哉ゆの如くゆる者三四年一日書肆文溪堂詣ぎて亦哄誘して前集の残ぎ果さゆると續せて刊刻せぎく欲ぎ予も亦些の技ゆて試みづから老を養ふ足らぎ且春日秋夕の長々しきを獨かも寝て果報を俟づもあら紛ぎ屡婦幼ふ字を教え代書を課せて稿を起ぎふ婦幼ハ文字ふ疎けぎバ其一句一行毎ふ教授叮寧反復ぎれども動ぎもバ少僻め思ひ違ゆ左ふ右ふ甚しきを誤字あぎども吾隻字だも見ることを得ぎ只讀せゆるぎ故ふ其訛誤を知ゆふ傷訓をのゝ讀ふ故ふ其訛誤を知ゆふ如ゆ又淨書筆畊のゆふ謬ゆ誤らゆもヨゆるぎど校訂も亦婦幼ふ任せて書肆の責を塞ぐ者玉石童子訓即是のゝ古より和漢の文人不幸ふ失明の後著述ある者を吟ずぎ然ると吾のゝ強てゆるれば止ることを知らぎとそ譏るもあらん笑ふもあるべ

又同好の諸君子へ予が苦樂と憐ぶもあり。らよく奇として愛るもヨろ。誤写の具眼の知る所。今さら正まふ及ばねども。發版の後問考て。稍其誤字を知るもあり。或ハ交遊の指摘ハよりて。驚ろされしも尠ろらぬと。抄録ろる者左の如し。

第一版 巻の一上 六丁左四行 大皇子 子ハ國の誤写ハ 同ハ 貌 貌ハ邈の誤写ハ 同巻 九丁右三行 燈行 顛倒ハ當ふ行燈ふ作るべし 同巻 十四丁左四行 作り出れと 下のとハ行ろ 同巻 十八丁左六行 牢 誤刀ろり 同巻 十九丁左九行 易違 當ふ易緯ふ作るべし ○巻の二下 二十六丁右一行 粥 粥ハ粥の誤写ハ ○巻の二上 二十二丁右三行 蜹蛇 蜹ハ蛇の誤写ハ ○巻の三上 七丁左六行 罬草面 罬ハ罩の誤写ハ 是ハ是の誤写ハ 發版の後補刻ハ

第二版 巻の三下 五丁左二行 容子 容ハ容の誤写ハ ○巻の四下 二十三丁左十行 毛髮 髮ハ髮の誤写ハ 同巻 二十九丁右 綉像中 掃除揚 揚ハ場の誤写ハ ○巻の五上 二丁右十行 風盧 盧ハ爐の誤写ハ 同巻 三丁左七行 月と蠋 蠋當ふ燭ふ作るべし ○巻の五下 一丁左六行 遊学 傍訓のらハの誤写ハ 同巻 三丁左七行 遊芸塾 塾の誤写ハ

第三版 巻六の十二 七丁左四行 御曹子 子ハ司の誤写ハ 同巻 十七丁左八行 片隻 片隻ハ隻矩の誤写ハ

巻の十九 丁左行 均達の達ハ束の誤写ハ 巻の十九 丁右 度機 機ハ當ふ度ふ作るべし

○巻の十二 五丁右行 我遠曾 誤写當ふ遠禖作るべし 同巻 十五丁右八行 活却 誤ハ當ふ活却作るべし ○巻の十三 二丁右 客扱ひ 脱字ハ せられね とかくの如し 同巻 三丁左九行 真術て 術ハ實の誤写ハ 同巻 六丁左七行 小謡亭 亭ハ曲の誤写ハ 同巻 十七丁右十行 陳難 陳當ふ諫ふ作るべし 同巻 十七丁左三行 緣故原 故の下ハの字脱し たり

○巻の十四 十三丁左八行 僅方 顛倒ハ當ふ方僅ふ作るべし 同巻 十六丁左八行 戈子 戈ハ弋の誤写ハ ○巻の十五 二丁左八行 吹ひてや ひの字ハ 同巻 五丁左六行 睡眈 眈ハ眈の誤写ハ 同巻 十五丁右 十一行 冽冷 冽ハ厥と 同巻 十七丁左 廳ねる 誤写ハ聽ふ作るべし 是他精細家の活眼とそ見られ 猶 抑書肆の發兄ふ性急ろる初校果れハ二校三校と後ふ 揚せて製本し。其間ふ二校三校と兼ぬるもれハ版ハ補刻ハ製本ハ誤写の儘ふ。世ふ見いるもあぬべし。その挙歳の暮るまでかく兄拈り出ける。風葉塵埃のあるを。いとゝるもうこもおかし。塵の世ふ表を隣の媒排ひ哉

弘化二年乙巳歳梢念五

四谷隱士識

窓井の方
婦言勿聽
烏恐彼牝
鷄之晨也
曽根見伍六郎
健宗それをごろくらうねむ

臺床唐三どのごとたらい
松ひとはあてこまの
ふるねはさきかな
録舊本小之井集中之句
奴隷小雪太
ちもべこゆきた

孝順反哺
島
貞操雪中
松
孝女梭手
防守筑四郎
李彦
相撲とり並ぶや
秋のかつら弥
録玄峯集中者
韓錦樅二郎
奈良櫻八重作

勇婦押繪
顔色雖不似
孟光之黒
勇敢久擇對
維女大夫
白日鳶
十六郎

世の中を夜ひ
まのなくもかう
本編作者自賛
鏑野郡司範的
部領大刀自

文錦堂蔵

新局玉石童子訓第四版自第四十六回至五十回總目録

○巻之十六　第四十六回
好純拐實暴巨棋狂態　主僕改貌旅宿中初髻

○巻之十七　第四十七回
七鹿山厄四少年異禍福　千仞谷中神靈出現新奇

○巻之十八　第四十八回
李偽兄健宗襲好純　驚醉夢良臣辨玉石

○巻之十九　第四十九回
野上驛悪僕賺悪主　立合阪仁人隣孝女

○巻之二十　第五十回
一金一藥盲亀遇浮木　押繪告禍行成勝通能

新局玉石童子訓巻之十六

東都　曲亭主人口授編次

第四十六回

好純実を拐る暴巨棋の狂態
主僕貌を改る旅宿中の初髻

再説大江杜四郎成勝。峯張栄六郎通能ハ病厄稍癒りて。他郷へ去まく欲
せるゆ。主人石見次好純ハ。猶陌を尋ねゆ。あれハ先試歩の為ゆとて。主僕割
籠餉を腰ゆし。七早旦より近郊ゆ逍遥せ。その日ハ枸杞村福富の方へとて
ゆく程ゆ。折ゆく二月の初旬ゆ。目ゆ美しく梅の花單葉ゆ散て。千葉ゆ猶
香ゆとて馨へ。路傍の樹芽若草春めいて。右も左も叢麥の圃より升る翔
鶴。藪莺も外ゆ鳴ゆ。調子ハ高く里神樂。今日ハも初午ゆりけれハ。稲荷
祭祀も天離る。鄙ゆあれど千仞剣。神を齋ゆの注連懺其村毎ゆ賑ゆく。

人の往還も常に倍も里の総角うち群て鮑の大鼓の音さへに初雷歟と思ひの隨に見盡して長閑春の日敬
ゐる。杜四郎と栄六と東とかく西とかく。思ひ思ひに見盡して長閑春の日敬
く時候。枸杞村まで。かゝり来れば程に後れさりける栄六。杜四郎を喚かけて。やよ
和子一憂時止りかゝ。已脱落しかゝるもあれ方僅憩ひ。後の村なる彼茶店に
菅笠と割籠とを措遺れあれば走りかゝりて食もて来てん。鬱の里入口ばかり
あり。這頭より観音寺の城へ捷徑あり。とかゝり。開を又人に問へ徐に行
かゝり。とかゝを杜四郎うち聞て。笠のとかゝる。惜むに足らぬものなれば。割籠
へ今朝主人の取出で。借されるを爭何にせん。戻りて食るもよかるべし。其捷徑の有
るべ栞を貼して其方へいざ。疾々せよとのたまへる。栄六ゝ。果ぞ程
なく逐就まちなんぞ。故来しに路へ蒐地に走りて見えぞ
ありけり。かゝる程に杜四郎成勝へ彼捷徑を問へ。やゝ四下を見

久るに。這頭へ一條の畷路。左右に最多る枸杞の。弥生に生繁るのを。憩
ふべき茶店もなく。前面より来る人にも逢ねば思難く猶ほ程ほと見れば
一箇の田婦あり。年齢は三十許にもあるべく。眼圓に脣厚く。身材高く肥
脂にて酒肥満とかゝ者に似たり。身に拷の廣袖衣二重に被て裾高に
褄折りて白紙二布の端を顕したるが。這頭の枸杞を芟採りて薪に做せ
ばあらむぞと。彼身に生に坐を占て連りに鎌を研てをり。當下杜四郎へ
件の田婦を呼かけて。平かなる言問へ。這里より観音寺の城へ捷
徑のあるべきを知りたるべきまゝ。とかゝを田婦見返りて噫さるも
なれば其聲音にて猜るに。他郷の人にぞあるべ。乍麼那里より来ま
なる。観音寺の城内に相識やあるまゝと。問復されて然りとよ。我は摂津國の旅
客にて。大江杜四郎成勝と喚る者に近曽遊歴して這地に来る。観音寺の

城内なる。高嶋生が由縁われば。去歳の秋より那里に在り。今日は這頭に遊び過して既に日影の敢えなければ。あろ只管いとぶれて捷徑あらばゆきく欲し。いろで詳に教えよかー。と説れて田婦舎笑て原來要ある孫力うるに疑ふて何を欲秘さん。問せるに捷徑は猶真直に二町だり。行せるつぐ右の方に最老る擅樹あり。其里より路を右に取りて十町有餘ゆるせるつぐ左右へ別る徑路あり。其里より路を左りに取りてゆくと又十町だりあて。彼城下に届りるん。左右をる違へのひとと指さー示して誨れば杜四郎歓びて。弁きまろ沼さり。きろん夫汝が猶頼むべる多あり。我と二路の一少年。後れて這里へ来るわん。其面影は箇様々打扮は如此と。其小年の過るを見ば。汝速く呼留めて。又捷徑を教示して我為に言伝せよ。一樹の蔭も他生の縁いでぐ。と諄くを田婦はいく點頭て其義をあろ沼佐りと。麥々

ありせるに杜四郎は応て又鎌を研てをり。是小より杜四郎はゆくと三町あまり。わして果して右方に擅樹あり。さるべし。と思ひ。かべ鼻紙を長く裂て。其下枝に結吊て。柴六の為に栞とて。他今かり来るまとて猶立在と半晌計。彼が又生憎に日影いよく敵ー。かべ。幾ばくを欲かして在るべる。程遠うるだ逐着ぬるん。と思捨く右の徑路をゆくとらまぐ三町に過ぐぞ。跡眼来ぬる件の田婦。利鎌を袖に隠し持て。竊歩まく近つ寄て。聲をもうけぞ背ろ。神晃めるを彼鎌を拉四郎の肩尖へ打ちけて曳く刃の光に杜四郎は吐嗟とぞろに身を渝しる修錬の剽捷二ぶび打入む鎌の柄と倶に利を左へ禁て耶と引被ぐて投しかべ田婦は杜四郎の頭顱の上をうら越て。筋斗りつ。三三間前向へ撞と倒れける。當下杜四郎成勝は思ひうけるる這宛家を見れば是別人なるぞ。鬱に捷徑を誨る。彼田婦なりければ且詐り且

怒れる堪ぞ。罵責る聲も急迫。這奴何等の怨ありて我を狙撃きく。そも意ふ前勇往を事とする。賊婦ありてわりらめ。疾首伏して縛の索を受よ。と敦圉う。其間ふ田婦ハ身を起し来て落ち鎌を掻含りつ。身を構へて疾視嗟る聲高ふ外面ふ出て烏滸をなのれた左ても右ても活てかへさん。我寃家うまこバ覚期の鳥ふ意表を示さん。死天三途の話柄ふ聞れかし。我身ハ拘杞ふ名も高き桑木の巨樸鬼妻と喚做されて親族もうく子もわるぐ三三年前ハ比より。黒鳥の盆九郎と狎深て連理の枕比翼鴛夜の衾ハ陝くとも廣ク世界ふ二人と云ふ郎ハ無慙や去歳の冬。你ぞ為ふ搦捕れて終ふ頭を刎られつり。と人傳ふ宮ー其日より憤胸ふ盈てらで怨を復さんぞと思なるふわるわぞも。寃家ハ只其名をのミ聞て。いまぞ其面を認らぞ。況彼身ハ城内ふ在りとーしくバ近法紀て。撃とたえて便ゆさふ憂りける日を過ちふ。今日料らぞも捷徑を。

問ー你ぞ聲音の浪華人ふ似るを。我亦思ふーあれバ言を設て問試ーふ漫ふ名告你ぞ命運既ふ盡ぬる時至りて我情人の讐敵ゆ。你ぞ面を認ーとり。惰るあるを推鎮めて這横路へ誑入れーハ其細頸を芟伐て業亡人ふ向んぞと思ふまるを知らぞや。とりぞも果ぞ杜四郎ハ呵々とうち笑ひて愚ー巨樸とやん彼盆九郎ハ罪人ー我家傳の刀子を竊含りたるのミゆくぞ人を害ー積悪あるバ終ふ死刑ふ行られーふ搦捕ーを咎ふーて我を怨むハ甚麼ぞや。膽魂ハ女ふ似けゆ勇あるふ似れども。理義ふ関ハ匹婦の本性物ふ狂ぐ後悔あん。早く惑ひを醒さぞや。と諭さを。ゆるぞ眼を睜りて。开々卑怯ー命や惜ハ盆九ふ罪のわるべあれ。彼人搦捕れぞハ。何でふ首を喪ふべハ只我怨ハ你ふ在り。似而非頑童奴覚期をせよ。と罵狂ふ匹婦の猿勇。五日の月と見光るぞ。利鎌を問ゆ。うち振りて

撥んと找むを杜四郎は右ふ反〜左ふ外して。両三番渡労まる。利鎌を丁と打落さ拳の冴へ雲間の電光顔を撲地と打悩せば。巨棋は吐嗟と瞋眩して怯むを見へうと両足を捉りて背へ楚と揉抗て登〜蒐りる三尺帯りて。結却て四下を見かへるふ臂近る老樹の杉ふ耀り〜藤蔓ありければ。右手を伸まる曳よせて罵狂ふ棄木の巨棋を曳搦よせて老樹の幹へ團々纏ゆぞ去てりける。その殷の勢ハ前板第四十五回の編左ふ詳しく浩處ふ峯張栄六郎通能ハ彼忘れる菅笠と割籠を肩ふ引かけて。遽〜くかへり来りる。杜四郎の遺〜たる栞あきバ惑ひもせぞ去てありけり。と淺影を遥ふ見り走着てやよ和子目今かへりゆたとのひつ又呀然と驚くる大さるぞやよ和子御身の肩尖より。鮮血多く流れるる疵を負せのひ〜欠と向ふたてめて心つく杜四郎もうち驚たて原来まの悪捉婦の鎌ふ鈍くも身を傷られ〜欠現我

るぐら由断ハ大敵其故ハ箇様ゃと巨棋ふ捷徑を問ひ〜始より。彼ら狼籍の事の顛末。巳上を沿ぞ拉ぞて那里の老樹ふ繋ぞ禁しる。其事の終まで詞急迫く解示せば。栄六ハよく怒ふ堪ぞ介らば是寛たまぐ紀。彼奴も盗児の支黨なるふ。ゆどて斫棄ぬざる。ゆで那頭辟ぞ沿く息の緒断んと敦圉猛く走蒐らまく去けるを杜四郎推禁めて。開ら大人氣ゆ〜敵まふ足らぬ狂女を殺して何ふせん。先我ま疵ふ仙丹を塗て宿所へいもぐべ〜。とのふ栄六有理と応て其偏祖を推脱せて。腰ふ吊しる薬籠より。彼仙丹を食ぞて杜四郎の瘡口へ〜布塗ら〜て。臭紙を刻て蓋ふまの罵狂ふ棄木の巨棋を。見えりもせぞうち連立て觀音寺の宿所へいもぐふ先度ふ懲て捷徑を求めぞ。故の瞰路ふ立かへりて直急ぞふ走るりのく。杜四郎の鎌瘡ハ彼仙丹を用ひ〜より。其血立地ふ止りて敢又疼

痛を覚ぜ。あの日點燭時候ゐ高嶋の宿りゐ還るゐ及びて瘡口うごりうゐ閉て。衣の障るを知らぜ。是よりの後一両日を歴ぬる隨ゐその金瘡皆愈て。迹ごゐ見えぜりゐけ。然ればあの両少年ハ仙丹神奇の徑験を悄地ゐ感じあり。間話休題。介程ゐ大江杜四郎。峯張楽六郎ハ當晩夕飯果て後主人石見次ゐうち向ひて。今日目擊せる郊外の春色風景を云云とらひ出ぜうち譚ゐ語次ゐ彼枸杞村ゐ棄木の巨棋の痕籍の為体を漏なさ。告げかば石見次驚紀く。斉を安うゐぬるゐりゐ其奴國家の法度を知らぜ。善悪邪正ゐ暗かるハ取るとりゐもるゐ紀狂女ゐりとも。捨置らば又何ゐ。殃危を釀せん欲是も亦知るべうぜ夫千丈の隄の頽るゐ。螻の穴より起るとらひ。小火倘滅さぜゐわうべ後の煽やをらゐ。先その消息を窺定めそ又せん術もありぬべ。嗚呼ゐ任のひねとゐ合て夜話ハ果ゐけり。その次の日ゐ石見次ハ心利ゐ若黨ゐ意衷を云云と宣示して悄地ゐ枸杞村へ遣ぎ。件の若黨黄昏時候ゐかうり来ハ隨即石見次ゐ報るゐう。小人今朝枸杞村ゐ赴紀て巨棋ゐ事の顛末を探りゐ。他ハ彼村ゐる。荘客某甲の妻ゐうり時より。酒を貪り賭泉ゐ耽りて。人ゐ忌るゐ毒婦ゐうりゐ。其良人身故りうより彼身貧うゐる隨ゐ。奸計を宗とゐ。村人些の失あれば其家ゐ跟入て。多く銭を取らぜれば敢去らぜ。生平ゐ酒肆ゐ赴紀て。醉ざれば敢えぜ。然ばそ其償を還さぜ日の多うれば酒杜氏等ハ困果て沽らぜとゐ怒狂ゐて刃を擲ち吸口をうち拂ゐ狼籍渥りゐ紀りゐうう。然ばゐ女流のゐうれば敵ゐ做さんハさぶゐて打懲ゐてを要せぜ。坊賈の悲しさハ只徑紀の妨ゐ做さぜと思べ賺寛解て反て酒を贈り。銭を取らせて告訴ゐる者ゐてゐけ且べ巨棋ハまもゐ忌憚らぜ不義の利を

巨楳乱醉して居掛酒屋を騒ぎ
小もの
おやめ
酒とうど
さと人
さと人

のこ欲もる程ゐ同氣相求めゝる。墨島盆九郎と密通まてより。送ゐ其悪を資けて人の憂ひゐ做ること多ゝり。有斯〳〵程ゐ盆九郎い積悪竟ゐ發覚れて大江主ゐ捕捕ゑ既ゐ死刑ゐ行はるゝ。かべ巨樸い愛惜のゝる方ゐゝやゐりけんうち歎ゐてゐりける比人の為ゐ哄誘されて万智計をや馮られけん大江主を仇と〳〵罵りて。いで怨を復さんとて。物狂ゐ〳〵做るまゝ。ありしゐ。昨日何人の所為ゐやゐりけん。長畷の横小路ゐて巨樸を結扭て老樹の幹へ緊〳〵括り置れ〳〵折。相識一箇の里人のゐろまゐゐ過るあり。巨樸い是を呼留めて只管極ひを求め〳〵。其人佛心をりて敢示頻つゞ。彼身を結扭〳〵藤蔓も長ゑ拭も鮮捨てゆゝとゐゐ。三町ゐ過ぎだ巨樸い乱心きとりけん。其頭ゐありける鎌撥含りて追携りゝ。其里人の肩尖より背まゝ。ざらりぶんと斫仆せば窮所の深傷ゐ一要時もゐ堪ぢ。開ゐ儘撞ゑ平張ける。巨樸ハ是を悔もせゞ血ゐ塗れゝる鎌うち振て狂ひ罵りゆゝ程ゐ。途ゐ逢ける里人の老幼男女甲乙とゐゝ。身を傷らゝ者多ゝりけるば血氣壯ゐる村人毎。素破事ありと起り立て。杓桿棒引提々々。走り集ゐ者数十名巨樸を中ゐ捉稠て。八方より撲ゐ程ゐ羅刹を欺く狂婦ゐれば。いゐゐゐて支西ゐ腕を折ゑ。頭砕けて。脳髄出てゞ死でける。既ゐ〳〵て事私ゐ治るべゝゐゐあゝざれば。村長故老驚ゐて。事の邪正を問訂〳〵。地方の莊官某甲ゐ訴て。実検使を請ふとゐゐ。人東西ゐ走り違ひて。罵り噪ゞひと言詳ゐ演〳〵。かべ石見仆又驚ゐて。先若黨を労ひつ。開ゐ隨ゐ退せて。然而杜四郎と米六ゐ巨樸ゐ横死の為体を。ゆゝつゝ隨ゐ宣示せば。両少手を拍ハ眉を顰めて。嘆息の外ゐりける。姑且〳〵て杜四郎のゐふゆゝ。巨樸の如ゐハ賊婦ゐれゞも。我其職ゐあゝざれば。搦捕ゑこを要せゞ。

只懲さまく思ひしかも。虎狼野心の癖あれば怨もあれど里の男女も妻く痩を負せ。欺天罰竟も免まじ。荘客們も敲殺されしも寔も自業自得ぬことなりを石見仆うちぬて。然れば上よ。そのゆゑ和君も巨楳を懲さんとて彼身を結杻ゆひしを村人等は知らぬ人ども事の讐断果るをまつ。他郷へ立去ゆひるべ後も其るを知る人ありて云ふと評せる折。逃うとやらるべうん。不本意ゆいあるべけれども。ゆくも止るも皆時あり。

おの義を思ひゆるぞや。とのかも杜四郎は然こと答て支の障をうちさぶる。嗟嘆も長い春の日を消し難くありけるぬぞも。三月も既も盡る時候。巨楳の一件果うとのふ風聲反ふぬえけり。登時高鳴石見仆は杜四郎と楽六ふ告るぞう。彼巨楳の横死の支も就て。枸杞村人の禀もより。其證据あるとして巨楳を敲殺しる壮佼等は疎忽の失を宥められて皆

赦ふ遇ぬとぬえうう。其故は彼巨楳も。身を傷られる村の男女は幸ふ。て死ふ至るぞ。皆その金瘡愈られるぞ。ちでめ彼横小路も背を斫らるし。荘客某甲は即死ぬれば敲ふ。ふ。有斯れば巨楳は里人の。諸多ふ死ぬ在るる。其罪解屍人を免るべうぞ。況他が年来の毒悪是時ふ遠くぬえて。その照験分明ぬれば則守の古沙汰として形の如くふ行うを。ゆ死。然れば枸杞村人は蠱毒を禳ひし心地もて置酒して祝ふも少うう祭ど。老て心弱も村人は後又巨楳の悪霊の。祟を做ぬとあうん欲して講を結び銭を集めて彼亡霊を葬りは為ふ五輪石塔婆を建立して追薦の讀経ぬ寧ふりのぬうとて商量最中ぬとのふ。おの美白人の噂ふ。彼首尾かくの如くぬれば。和君達ふ障りあるし。今日よりして那里まれ。發足は隨意ぬれども。已猶思ふうあり。大江主は十七歳峰張

生ハ十九ヶ年ぞや。今ヲ猶總角の儘ゆて。萬里の逆路ヲ赴ゆ。胸安ヶ〻ざる所あり。故何とぞ〻べ人少年と見る時ハ思ひ侮るゝ是あるべ〻。或ハ龍陽鶏姦の惑ひを做せ小人の是ヶ〻とそべ〻ゞ是ゆあり。て此を思へべ早く額髮を剃除ゆて男ヲ成ヶ〻ゞ。倘我意見ヲ從ひゆ〻べ。明日ハ黄道吉日と。好結不肖ヲ〻て其人ヲ〻ゞ。故の峯張先生の弟子ゝゝれべ。舊好親族の思ひを做せり。幸ヲ嫌れぞ。ひゝで烏帽子をまゝ〻せゝ〻。欲せ。ゝの義誰何と談ぞれべ楽六ゝゝゆも。さゝ〻と杜四郎異義ゝ〻。欽びて答ゝゆ。教諭誠ヲ其理あり。我們貌を革ゝヲ親ヲも兄ヲも告ぜ。して自恣ゝゆハ。実ヲ非禮ヲ似ゝゝ。旅ヲ〻ゝれべ許されやせん。最辱〻ゝゆと謝ぞれべ亦楽六も。俱ヲ欽びのさゝゝを演て。猶も餘談ヲ及び〻ゝかべ。石見仗ハ両少年の温凉ヲ〻て恰利

さの。今ヲ〻ゝゝゆゝゝゝの甲斐ありと思ふゆど。先その准備をいそぐゝる。次の日大江峯張の。初髮の祝壽あり。石見仗是をすゝして。理髮烏帽子親を兼帶ぞ。ゝの日杜四郎と楽六の頗髮を剃除ゝヲ石見仗ハ。僅ヲ剃刀を當ゝるのゝゆ。その技ゆゝゝゝる老僕若黨立代りて。剃もゝゝ。結髮果て。鏡を與へて見せゝゝゞ。石見仗長江ゝゝ。前ヲ居り。後ヲ立て。その仗ゝゝゝを好とゝゝり。是ゝゝして杜四郎楽六を俱ヲ其小名の四郎楽六をゝして自稱せゞ。各その実名の成勝通能とのゝ唱へけ。斯而ゝの主僕ハ。俱ヲ衣裳を整へて當城内ヲ還〻祀られゝゝヲ。ゝ賀の神社へ詣ゝて。高嶋の若黨を案内ヲゝゝ。立て。拜と果てゝゝ〻ゝ来ゝれべ壽酒饗饌の儲あり。ゝの義ゝ石見仗が心を用ひて。為ヲ祝壽を做せゝ。然れべゝの賀席ヲ敢他人を交へゞ。成勝通能を上坐ヲ推居て高嶋夫婦相伴ゝり。その餘

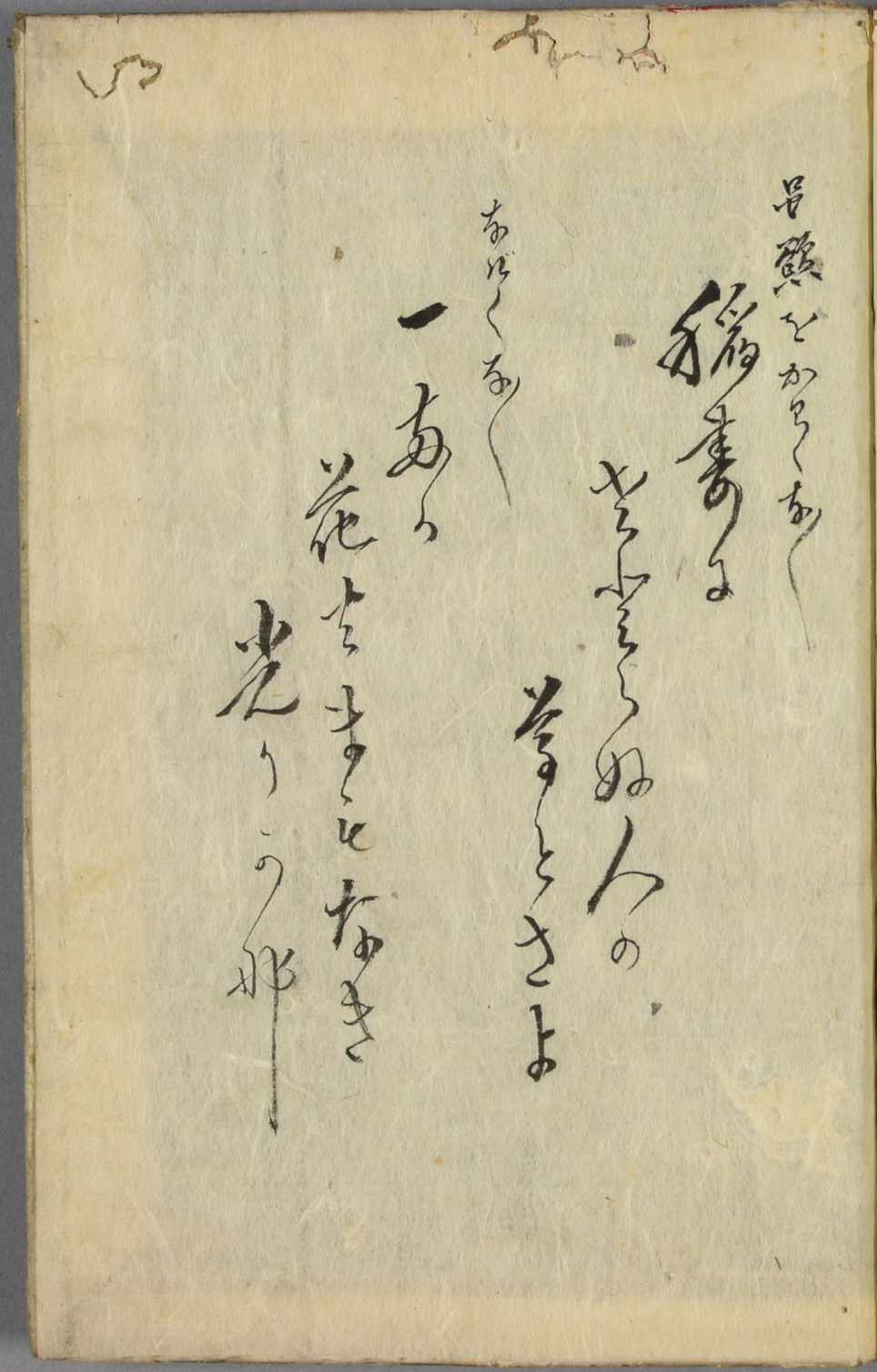
一家児なる。老僕若黨奴婢をまでも。物喫せ酒飲せて終日歓びを盡し
けり。石見牧の師恩を思ふ誠意の篤るハ十三屋九四郎ハ劣るべうもあら
ざれば成勝と通能ハ千謝萬謝も猶足らぬと感悦涯りなきのみ。斯
而在るべきハあらざれば明日ハ這地を立去らんと主人夫婦ハ別れを告るハ。
石見牧諾て和君達去歳より〳〵て屢事の障りあり。淹留今ハ及び〳〵かべ。
心のままのせらるゝハん發足ハ隨意なるべし。但し這里より若狭へハ
越路ハ之赴くハ二路あり。故官道ハ要害の為前後ハ新関を置られて當
家の士卒ハあらざるより敢往還を許されぬ。ハの便路を除くの外陸ハ峩々
たる山路ハ之沙礫最多かれば土人綽號して碌々越と呼做し〳〵り其峻岨艱
難を嫌ふ者ハ琵琶湖の畔ハ立出て水路をゆくも多うるべし。そハ便宜ハ似
たれども動もすれば風俟して日を累るもあるべきハあらねば近道も反て遠道なべし。

這二路を擇とハ成勝早の尋思ハ及ぶ通能と商量するハ愈ハ
水路を欲して湖水の畔ハ赴く親しかりける衆少年の水送の為ハとそ。
出来ぬるもあらぬべし。然らば路次の煩へ碌々越をゆくべしとそ。ハの意を以
答へしかば石見牧點頭て介らば御導の為ハ若黨奴隷をまでもとべし。
とハを成勝ハあへぬ。いとぞかハ其義ハ及んハ我們ハ旅より旅ハ光陰を送
る者なるハ非如一驛半日ありとも。伴當なぶ用ふべしと推辭ば通能ハ復
ハのハ寧明日の起行ハ人ハ知らぬぞまく欲を伴當なるべきとそうるハれと
ハのハ石見牧ハ強難て竟ハ其意ハ任せつ菅笠ハ拭鼻紙ハんど草鞋
ハ至るまで主僕の為ハ心を屬て只管餘波を惜むのみハの時成勝通能
ハ逗留の程新製の衣裳ハ逆旅ハ要ふべしとて去歳より老実ハの去
る。老僕若黨ハ皆取らせて。雨衣をのみ携ゆくべしハの宵ハ高嶋の妻

長江さゝ良人と俱ゐ團坐ゐ入りて云云と話慰るゐ周防ゐありける獨子の硯吉郎のゐをゝ思ひ出ゐ出て堪ぎや涙をうち嘆けり。現子を思ふ親ぎろ誰もかくこそあるべけゝとゝ思ひ袖ど然ゝも身ゆゑ知る成勝と通能ゐ慰難て惆然ゝる。折々四月の初旬ゐて短夜ゐれば辭退て俱ゐ枕ゐ就ゐゝより幾程もなく呼覚さる。主僕早飯を果ゝ割籠を腰ゐして。俱ゐ身軽ゐ打扮ゐ主人夫婦ゐ告別ゝて鳥の茂林を離る時候遽ゝく立出れば石見ゐ長江ゐさゝ奴婢等る都て別を惜て門候ゐ立て目送りけり。當下石見ゐ好純ゐ妻の長江を見久りて我今番ゐとやうやくれ師恩ゐ報ひゐるゞ如ゝ。世ゐ人の親ゝる者大江峠張主僕の如ゐ児子ゐらば何をか憂ひん。実ゐ彼家の麒麟児ゐる哉羨むべゝゝと連りゐ嘆賞きてゝりける。ゐ程ゐ大江甚郎成勝峠張采六郎通能ゐ觀音寺の二の城門を障りもあゝぞ出離れてゆくとゝ思ぎ十町ゐ足らぎ。ろゝまゝ見久るべ。幾の程ゐ狩眼ゐて来ゐけん高嶋の若黨奴隷ぞ後方ゐ立て礼を做を思ひうけゐるゐれば成勝と通能ゐ訝りるゞゝ歩を駐めて先其故を諮るゐ。件の若黨答ていふゝ。御御道導のゐゝゝ。固く辭ゝせるゐゝ。主人ゐ左右ゐ安心せぎ山を踰果のゐ心。俱ゝ。まゝと吟味られてまゐりゐりと告るを成勝通能うちなて現彼人の信義ゐ篤ゐ。かゝ心を用ひられゐ。遣り返さんゐ無礼るべゝと思べ俱ゐ労ゐ。ゐ行ぎ隨ゐ將てゆく程ゐその路一里許ゐゝて早ゝ山脚ゐ来ゐけるゐ其頭ゐ茶店ありければ擢且茲ゐ憩んとて成勝通能伴當ゐ。発ゐ尻をうち掛て共ゐ山茶を喫程ゐ通能ゐ茶博士ゐうち向ひて碌々越の路程嶮岨遠近を問ひけるゐ茶博士答て然ゐ素ゐの山路ゐ官道るゝねど曩ゐ守の御制度とゝて故道を空

がれ〜とり。若狭越前あたゝめ〜旅客のをきく過るゆゑ又這山を七鹿山と唱做〜るも碌々越といふことも皆國人の訛りと素さの山ゆゑ名ゐて故ゐ無名山といひけるを七鹿山と書改め又さの山路ゐ六六三十六町の嶮岨あれば六六越と名づけ〜を碌々越ゐ作るゆゑわろん。皆是儒士の傳會ゐらん。と物識人ハ咲〜もいひた又さの山の半腹より。美濃路へ出る捷徑あり。そゝ只樵夫の通ふのゝ旅客ハゆるぎひと言正首ゐ説示をを成勝も側ゆ〜て。然らば去向ハ心易ゝ。嶮岨ハ三十六町のゝ御導ハ実ゐ要ゐ〜。謝〜て他ゝを返さえんと通能と共倡ゐ高嶋の若黨奴隷を叮寧ゐ労ふて返さまく欲ゝゐ。とゐ這高嶋の若黨ハ勾津字六と唱做〜て性老実ゐ者ゐれば敢其義ゐ従ゐぞ奴隷ハ名を可平といふ。ゐも愚直人ゐ〜をそいふ〜て還るべた遠〜〜く。発を外〜て跪ゐく俱ゐいふゆゑ。豫知らせのゝ如く。主人石見次ハ賞罰正〜く〜べ。縦令弊せのゝとも。号困ゐ〜て茲ゐりかくゝぶ。罪免るべくゐいふぞ。御覧〜〜いとも。いらぐ今宵の御宿ゝを御伴をゝを願〜けるぞいらぐ〜と諄久を言果べうゐあらざれば成勝も通能も困〜て又いふ〜もゐく。然らばその意ゐ任せんと茶博士ゐ茶代を還〜て山路の為ゐ茲ゆて賣る。竹杖四半買含ゐりつ。各是を衝立て碌々越を臨てゆく程ゐ〜〜ゐ其路嶮〜〜ぞ。俗ゐ云爪頭陟ゆて。聊ゐ艱苦を覚ぞ向上ゐ青壁嵯峨〜て緑樹森々。夏尚寒く。直下せば碧潭背〜〜て清若蒸々水又遠ゐ。或ハ岳躑躅の韓絳ゐ。分けゆく人を深〜〜ゐ〜〜と思ふ最興ゐり。或ハ波流花の真白ゐ。時ゐ〜ゐ雪のまゝ消ぞゐ。燈ゐ代夜学ゐ耽り〜。むり〜を恐ぶ心切と春の青山何時紫ゐけん。今日初聲の杜鵑四月の天の薄曇ゐ二四八と〜も珍〜〜目さえ耳さえ暇ゐ。飽ゐ眺望ハ

七鹿山の巓
ふ成勝通能
矢傷野猪ふ
逢ふ

去ぜ一雪時の程ゆえ既に嶺に至りて宛屏風を建てる如く。路険くして沙礫多り。実に碌々越の名空しからず。一歩毎に小心せざれば礫轢に載られて忽地千仞の谷に陥ん成勝と通能に送に氣を励して杖をたちたに辛くして登る者十八九町。ようやく嶺に至りて最平坦ゆえ路廣く。左右に生茂りたる夏樹柱の間に土地の小社ありけり。旅客の茲に休して幣賄ひて為るべし。彼字六と可平に嶮岨ゆえ疲れ困んで後れて来ぎりしかば。這方の主僕いそを俟んとて。小社の下擅に尻を掛て倶に憩ふて在りし程に前面に高く夏草を踏披て突然と走り出来る両箇の暴野豬。倶に矢傷を負ふたる欲威勢猛く成勝等を蒐んと找やべ成勝通能吐嗟と左右へ避別きて。寄らば刺んと疾視たり。その段尚文爻けまべ又下回に解分るを聴孫かし。

新局玉石童子訓巻之十六終